内山俊彦先生の思い出

末永　高康

人の記憶はあてにならない。いや、あてにならないのはわたしの記憶だけなのかも知れないが、内山先生が京大に移られたその年に、自分は大學院に入學したものとばかり思い込んでいた。今回この「思い出」を書くにあたり調べてみると、先生が京大に移られたのは一九八八年四月、その時わたしは院浪の聽講生で、修士に上がったのは翌年。先生が京大を退官されたのが一九九七年三月、その時までわたしは研修員をしていたから、大學院生時代をまるまる先生のもとで過ごしたことになる。研究領域も先生と大きく重なっているから、さぞや濃密な指導を受けたことであろう、と思われるかも知れないが、さにあらず。わたしは出來の惡い學生で、自分から積極的に先生の所に行って指導を仰ぐこともしなかったし、今とは違って、教官の方から積極的に學生に介入していくような時代でもなかったから、講義や演習の場を除けば、日常的に何か特別な指導を受けたということはない。ただ、今でも思い出すのは、投稿豫定の拙稿を先生に見ていただいた時のことである。

下宿のこたつの上の受話器を取ったのは晩の八時くらいだったと思う。「内山ですが、今、時間は大丈夫かね、きみの手元に原稿はあるかね」との言葉に「はい」と答えて、そこから拙稿の問題點の指摘が始まった。拙稿が穴ばか

りであったということもあろうが、頁ごとに數か所の指摘、手元の原稿を繰りながら電話口の先生の指摘を書き込み、最後のページの指摘が終わった時にはすでに十時を回っていたかと思う。底冷えのする冬の京都の夜、受話器を持っていた左手の冷たさは今でも覺えている。主觀的には永遠とも思える時間で、「これだけの部分を書き改めるのも大變だろうが、締め切りには間に合うかね」とのお言葉に「何とかいたします」と答えて受話器を置いたときにはほとんど倒れんばかりであった。

この時の指導がどうして電話口になったのかまったく覺えていない。修正の時間を考えれば少しでも早く指摘しておいた方がよかろうという先生の親切だったのだと思う。江戸っ子の先生は、わたしのような田舎者から見るとややせっかちに思えることもあったのだが、このようなせっかちはありがたい。しかも、問題點を指摘しながら、どのように直せばよいのかまでほとんど先生がご自身で話をされてしまっているのである。その方向に書き改めていけば、それだけ論文の完成度が上がる。電話口ではひたすら緊張していたものの、これほどありがたい指導はないと、後から思った。

先生が京大での演習で最初に取り上げられたのは『周易正義』で、冒頭の孔穎達の序を讀み終えるのに一年くらいかかったかと思う。擔當學生が訓讀し、出典や解釋を示して、そこに先生がコメントを加えるという演習のスタイルそのものはかわらないものの、先生ご自身が典據等を板書され丁寧に解説される場面が、京大の他の先生方より多かったように記憶している。われわれ受講生にとって不思議だったのは、その板書される文章の出どころである。いったいどのように調べてこの出典にたどり着かれたのかという點もあったのだが、それよりもどこにそれがメモされているのかわからなかったのである。先生が手にされているのはわれわれが手にしているのと同じ阮刻本のコピーだけ

である。時折、それを目に近づけられながら、かなり長い文章も板書されていくのであるが、周易序にかかわる膨大な文章をすべてメモ書きするようなスペースがそこにあるとは思われなかった。

この謎が解けたのは、先生が亡くなられてからである。内山先生の思い出にと、先生が使われていた皮錫瑞の『經學歴史』一冊を宇佐美文理先生が送ってくださった。山口大時代に演習で使われていたのであろう、その第二章から第五章に膨大な書き込みがなされている。老眼の入り始めたわたしの目にはもはや判讀不可能な小さな文字でびっしりと。

阮刻本のコピーも同じ狀態だったのであろう。先生が『周易正義』を講義されていた頃と同じ年代にわたしもさしかかっているが、先生は老眼に苦しまれることはなかったのであろうか。そういえば、先生が病氣で授業を休講にされたという記憶がない。華奢な體つきの先生ではあったが、その精神とともに肉體もまた頑強であられたのであろう。

これも『周易正義』の演習の時のことである。何という言葉か忘れてしまったが、正義のなかのある語について、當時、助手をされていた武田時昌先生が用例を示された時に、先生が「ほう、そんな用例がありましたか、よく見つけましたね」と言われたことがある。武田先生が示されたのは實は『大漢和』に取られている用例である。先生から「諸橋は引くな」と言われた記憶はないものの、ご自身は諸橋『大漢和』を引かれることはなかったようなのである。「諸橋は使ってはいけない」が現實に生きていた規範であることを知って妙に感心するとともに、偶然ではあろうが先生が探し出せなかったような用例が『大漢和』にあるのに驚いたものである。

特殊講義では、「中國古代の歴史意識」を主題として話をされていた。エリアーデなどを引きつつ圓環的時間と直線的時間について觸れながら韓非子の歴史意識について話をされていたのを記憶しているので、太古から始めて、漢

代に入る頃までについては講義されていたと思う。いつも、使い込まれた大學ノート一冊を手にしながら話をされていた。このノートを覗き込んだ受講生の話によると、左側のページにはきれいに文章が書かれていて、右側のページは基本的に白紙で、時折、左ページの文章を補足する資料や文章が引かれていたとのことである。『中國古代思想史における自然認識』につづく第二彈を準備されながら講義をされていたのであろう。退官後もこのお仕事は續けられていたはずで、何かの折に先生から鄭玄の歴史意識について書かれた拔き刷りをいただいて、『歴史意識』の完成も近いのであろうと期待したものである。ご自身の學問に嚴しい先生であられたから、未定稿を世に出すことなど考えてはいらっしゃらないであろうが、あの時の講義ノートがまだ殘っているのであれば、是非とも出版してほしいものである。『自然認識』によってわたしが育てられたように、『歴史意識』によって育っていく若者が必ず出てくるはずである。

學生時代に先輩方からは「自分の先生と同じ專門領域に進んではいけない」と言われていた。縮小再生産にしかならないからである。その禁をわたしは犯した。とはいえ最初から縮小再生産に甘んずる若者はいない。たとえ部分的でもよい、何とか乘り越えようとしてあがくのだが、そのたびに先生の『自然認識』の磁場に飲み込まれてしまう。そのうちにようやく氣付いた。そもそも『自然認識』を乘り越えることなどできないのである。近年は新しい資料も出てきているから、『自然認識』の記述に修正を加えるべき點がまったく無いとは言わないが、それは大した問題ではない。『自然認識』の魅力は、その思想史を構成する視角・方法論の明確さと、その視角・方法論に立った、各思想に對する犀利な分析とにある。同じ視角・方法論に立つ限り、『自然認識』を越える成果は得られない、その意味で文字通りの最高峰なのである。わたしにできることは、これとは別の視角・方法論を模索することだけであった。

ただ、これは『自然認識』の磁場からのがれられたことを意味しない。孟子、墨子、莊子、韓非子、そしてもちろん荀子、先秦諸子のどの思想を論ずるにしても、まず念頭にあるのは『自然認識』や『荀子』をはじめとする先生のお仕事である。『自然認識』とは違う視點に立とうとあがけばあがくほど、『自然認識』の視角・方法論が強く意識されるし、その鋭い思想分析はいやがおうでもこちらに問題を突き付けてくる。近年は禮關係の文獻など先生があまり扱われなかったものを研究對象とすることが多くなったから、『自然認識』を繙く回數も減ってはきているものの、この磁場からのがれられることは今後もないであろう。わたしにとって先生はいまも生き續けているのである。

唯物論者であることを自ら宣言されていた先生が、死や死後の世界についてどのようにお考えになられていたのか、わたしにはわからない。肉體の滅びたものに對して「生き續ける」などと言ってはいけないと先生はお叱りになられるかも知れない。しかし、死者を生きたものとしてその精神と對峙するのは生者の特權である。「迷惑だ」と言われる先生の顔が浮かぶが、われわれのためにも今しばらく生き續けていただきたいと思う。否、生者の特權を振り回すまでもないであろう。そのお仕事とともに先生は今後も長く生き續けていかれるはずである。